追悼文　名誉会員　故 前川 昭彦 博士

前川先生との思い出

2024 年 10 月 18 日，前川昭彦博士が逝去されました享年 85 歳でした。謹んでお悔やみ申し上げます。

ご存じの通り先生は研究はもとより若手の教育，育成に多大の尽力を注がれ多くのお弟子さんを育てました。

先生は 1968（昭和 43 年）名古屋市立大学医学部大学院をご卒業後，同大の第二病理の助手として勤められ，その 2 年後 1970（昭和 45 年）国立衛生試験所（現：国立医薬品食品衛生研究所）に新設された薬品病理部の室長として箱根の山を越え世田谷に赴任しました。生まれは広島，大学は名古屋と関西人でしたが関西弁の記憶にありません。しかし瀬戸内海の魚が一番旨いが口癖せでした。

薬品病理部の初代部長は小田嶋成和博士で室長は前川昭彦先生と石館 基先生の二室体制でした。同部は昭和 49 年に創立 100 周年を迎えた歴史ある国立衛試に新設された部署で，すべてが新たな挑戦で活気に満ちていました。

1978（昭和 53 年）安全性生物試験研究センター開設に伴い新設された変異原性部の部長に石館室長が薬品病理部も病理部に改名，小田嶋部長のもと前川昭彦，高橋道人，黒川雄二の 3 名が室長となりました。

あるとき訪問者が前川先生を部長と勘違いし挨拶するのを部長は傍でパイプをくわえ微笑みながら静観し，前川先生はとても恥ずかしかったそうです。

私とディスカッション顕微鏡をのぞいているとき，時折足元からの微振動で目が回り「君は酒には強いけど鏡顕だとすぐ酔うね」といわれ，頓珍漢のことを口にすると「なんやてぃー」と指示棒が何度も降ってきました。

しかし，2 年後の 1980（昭和 55 年）小田嶋部長が厚生省（当時）近くの駐車場で倒れ突然帰らぬ人となってしまいました。52 歳の若さです。

小田嶋部長のもとに集まった室長はもとより国内は大きなダメージでした。部内の古参であるゆえの前川先生の苦悩は大変なものでした。新部長を迎えたのち高橋先生が病理部長，黒川先生が毒性部長となり，1990（平成 2 年）に前川先生は国立衛試を去り，佐々木研究所病理部長に就任後，2001（平成 13 年）には佐々木研究所第 7 代所長に就任されました。

2024 年 12 月

日本毒性病理学会名誉会員・元国立衛生試験所安全性生物試験研究センター病理部
小野寺 博志

前川先生との思い出

前川昭彦先生に対し，心から哀悼の意を表し，御冥福をお祈り申し上げます。前川先生の御訃報に接した時，私は，大きな喪失感と深い痛みを覚えました。前川先生に公私にわたる御指導を得た方々は私を含めてとても多いと承知しています。みなさまの御気持ち，お察し申し上げます。

前川先生は，雌性生殖器の発がんを中心とする毒性病理学の分野で，自ら精力的に研究されるのみならず，多くの後進の指導をなさいました。多くのお弟子さん達が毒性病理学の分野で指導的な役割を担っており，お弟子さん以外でも現在の毒性病理学分野で活躍なさっている方々の多くがなんらかの形で前川先生の御指導を得ていると言っても過言ではないと思います。日本毒性病理学会においては，1998 年（平成 10 年）に「あの」東京国際フォーラムで第 14 回年次学術集会を会長として開催されました。東京国際フォーラムは現在も超一流の国際コンベンションセンターですが，1997 年（平成 9 年）の開館ですから，先生は実に開館の翌年に学術集会をなさったわけです。さすがです。さらに，2001 年（平成 13 年）から 2004 年（平成 16 年）まで第 3 代理事長を務められ，学会の現代化に多大な貢献をなさいました。

前川先生は，また，化学物質のリスク評価・管理に係わる行政に深く関与されました。関係する省庁の審議会・調査会等の委員を歴任され，今と違って紙媒体で資料が送られてきていた当時，先生のオフィスにはそうした資料が山積みになっていたことを記憶しています。

前川先生は，国立衛生試験所（現：国立医薬品食品衛生研究所）におられた頃から，衛試内外の毒性病理学分野の若手の教育に取り組まれ，佐々木研に移られてからも多くの研究生を受け入れておられました。また，多くの会員を擁する半公的な勉強会のほか，病理部研究員と新旧研究生をメンバーとする非公的な勉強会を定期的に開催されていました。先生の御指導は厳しいもので，参加者の緊張感は大きかったのですが，とても勉強になるもので，参加者はみな真剣に先生の御指導を受けていました。前者の勉強会は 2006 年（平成 18 年）の佐々木研における実質的な研究活動停止に伴う病理部の閉鎖後も定期的に行われ，さらに前川先生が身を引かれた後も「前川ゼミナール」として現在も受け継がれています。前川先生にとって，このことはとても誇らしく，うれしいことであったと思います。私が申し上げるのはたいへん僭越ですが，関係のみなさまには篤くお礼を申し上げ，今後も前川先生の御名前を冠して末永く後進の育成に貢献していただければうれしく思います。

最後に少しだけ個人的な想い出を述べさせていただきます。私は若輩の頃から学会・研究会等で前川先生にお会いする機会を得て，折に触れて教えをいただいていましたが，2002 年（平成 14 年）に財団法人 佐々木研究所に病理部長として赴任するに当たり，所長でいらした前川先生を直属上司と仰ぐことになりました。それまで「偉い先生」として仰ぎ見ていた先生に直接的な御指導をいただけることになり，感慨一入であったことを記憶しています。当時，先生は所長として研究所全体の運営に係わっておられましたが，2001 年（平成 13 年）までは病理部長でいらしたことから，様々な御教示・御助力をくださり，頼りない私を導いてくださいました。当時のことを思うと，いくら感謝しても足りない想いです。

前川先生は，お酒が大好きでいらして，折に触れて御一緒させていただきました。奥様や私の妻と御食事を共にさせていただいたこともあり，とてもうれしい想い出です。前述の勉強会などの催しの後にもれなく開かれた懇親会ではさっきまで神妙な顔をして御指導を受けていた若い人達とざっくばらんに交わられ，また，佐々木研病理部 OB 会ではなつかしい顔に囲まれ，そんな席で楽しそうにしておられた御姿が今も忘れられません。お酒にはめっぽう御強い先生でしたが，それ故に止まらないので，最後は若干 ... なことも多々あり，電車での帰宅途上でお別れする時に心配になったこともありました。とにかく「つまみ」を食べられないので，そこだけは偉そうに注意させていただいていました。そうするとばつが悪そうに少しだけ御食べになるのですが，すぐにまた ...　前川先生のことですから，天国では，酔いを気にせず美酒を嗜まれていることでしょう。

前川先生の口癖のひとつに「俺は死んだ人を診る医者だ」というのがあります。自嘲じみた口調で語られるのですが，実は，病理医としての誇りをもって仰っているのだと感じていました。毒性病理・実験病理の分野で高名であられた先生ですが，医師であり病理医であることがベースであるということを自認なさると共に，それを忘れてはいけないということを私達，医師である研究者に教えてくださっていたのだと思います。

長くなってしまいました。此度の追悼文では，通例のような「固い」文章でなく想い出を語ろう，衛試時代を自分が書くから佐々木研時代を君が書いてくれという小野寺博志 先生の想いに同感し，日本毒性病理学会の鈴木雅実 理事長や古川 賢 総務委員長ほか関係各位のあたたかい御理解を得て，異例の「柔らかい」文章で綴らせていただきました。前川先生が許してくださり，喜んでいただければよいのですが ...

前川先生の毒性病理学や化学物質のリスク評価・管理行政における業績や存在感はとても大きく，先生を喪ったことはそれらの分野にとって重大な損失です。当該分野関係のみなさまにおかれては，先生の御貢献に感謝し，先生からいただいた財産を次代に繋ぐことで，御恩に報いていただければありがたく思います。私は，前川先生の御業績と想いが毒性病理学に携わる研究者，化学物質の安全な普及に係わる産官学の関係者に受け継がれ，彼ら・彼女らを通して永遠に生き続けることを信じ，前川先生からいただいた御指導の数々に感謝するものであります。

2024 年 12 月

日本毒性病理学会名誉会員・帝京平成大学健康医療スポーツ学科
中江 大